「かかりつけ医」と私

毎日新聞千葉支局長
大高 和雄

「医は仁術」

「三丁目の夕日」という昭和30年代を描いた映画に、「悪魔」と呼ばれる医師が登場する。「痛い注射を打つから」という理由で、子供たちに、そんなひどい呼び名を付けられたのだが、演じる三浦友和の穏やかなたたずまいもあり、信頼感にあふれていた。

その「悪魔」医師が、古いスクーターで往診しているのを見て、幼い頃を思い出した。時代は少し下って昭和40年代。私は、小学校を皆勤したほど健康には恵まれていたが、休日にひどい高熱を出したことがある。古いスクーターで往診に来てくれた年配の医師は、顔こそごつくて怖かったが、「痛い注射」などは打たず、苦くて甘い、シロップのような飲み薬を出してくれた。

熱を出しても、腹をこわしても、けがをしても、火傷をしても我が家はこの医師にかかっていた。「すぐ治る」という強い信頼感があった。私の熱も翌日にはすっかり引いた。苦くて甘い飲み薬より、医師への信頼感の方が、病にはよく効いたのかもしれない。

昨年10月から千葉市内に単身赴任している。独り身にとって、病気で寝込むほど心細いことはない。気を張っていたつもりだったが、新年になって、ひどい風邪をひいた。年末から忘年会、新年会と飲み続け、体がなまりきっていたところに厳しい寒さの直撃を受け、ひとたまりもなかった。

熱で全身の力が抜け、起き上がろうとしても踏ん張れない。昼と夜に新年会の予定があったが、出られる状況ではなかった(夜は千葉市医師会主催でした。失礼しました)。買い置きの大衆薬を飲み、布団にくるまりながら、あの年配の医師のごつくて怖い顔と苦くて甘い飲み薬の味を懐かしく思い浮かべた。

高齢化の進展で、社会保障費は急増を続ける。政府は、医療費の抑制に懸命だ。医療をめぐる環境は厳しさを増す。しかしそれでも、「医は仁術」であって欲しい。私たちは、多くの医師が、頼り切れる「かかりつけ医」であり続けることを願っている。

「かかりつけ医」は、身近なナビゲーター。

幅広い医療知識と適切な医療ネットワークで頼りになります。

「かかりつけ医」を持ちましょう。

社団法人 千葉県医師会

自己判断より、すぐ相談

「かかりつけ医」は、病気の時だけでなく、予防や健康管理について適切なアドバイスをしてくれる、身近な診療所の開業医です。多くの専門医療のネットワークを持ち、必要に応じて適切な専門医を紹介するなど、治療の道しるべをつけてくれるナビゲーターとして頼りになる存在です。

「かかりつけ医」は、開業医になる前は大学病院や公立病院などで長い勤務経験を積んでいますので、病気の診断や治療については大病院の医師に劣ることはありません。高度な医療や特殊な検査が必要な場合は、大病院と連携を図っていますので専門医に紹介状を書いてくれます。いざという時、「かかりつけ医」はあなたの味方です。